

吉本ばなな「白河夜船」「ある体験」試論

〈夜の三部作〉論のためのノートII

岡田 豊

1

いつから私はひとりである時、こんなに眠るようになったのだろう。

「白河夜船」(初出 昭和六十三年十二月「海燕」)は、語り手・寺子のこの問いから語り始められている。この冒頭から少し離れた箇所にも、「いつから眠りに身をまかせようになっちゃったのだろう。(中略)……私が潑刺としていつもはつきり目覚めていたのはいつ頃なのだろう。」という言い方が出てくる。眠るといふ営みに対する問いから始まる物語と言い換えてよい。吉本ばななのテキストを語りの構造という観点から論及したものがほとんどない研究状況の中で、〈夜の三部作〉の一つである、「夜と夜の旅人」をその観点から論じたときにもふれておいたのだが、本稿の対象となる「白河夜船」も、一人称の語り手による語りである。寺子の語りの根幹にはつねにこの問いがかかわっている点をまずはおさえておこう。「白河夜船」と「ある体験」(平成元年七月「海燕」)は、ともに

一六三

三角関係の恋愛の当事者が物語行為を遂行する。この点、「夜と夜の旅人」の語り手・芝美が三角関係を傍観する立場にあつたことと相違する。簡単な言い方に過ぎるかもしれないが、「白河夜船」で最後に出てくる「小さな蘇生の物語」とは、眠りという営みについての素朴な問いから出発し、それに対する自分なりの答えを探し求める過程で

一六四

発見した諸々の関心事を、彼女が複雑に絡み合わせながら織り込んだ物語のことである。それならば、この疑問の表現自体にどのようなメッセー^ジ性を読み取ることができるのだろうか。「いつから」という疑問の表現がある通り、こんなに眠るようになった時期の特定を指そうとする表現があるから、例えば、眠りとは何かというような、根本的な性質を追究するような問いというまとめ方は不十分であろう。では、正確な時期の特定だけが、目的なのかといえば、おそらくそうでもあるまい。「いつ」なのかさえも忘れるくらいに日常化してしまったところの、「こんなに」で記されるような尋常ではない睡眠量という非日常的な事態が入り込んできた事実を強調するために、すなわち了解不能な事態が寺子を襲ったことを印象づけるために、先のような問いが繰り返し語りの冒頭にあらわれていたのである。眠りが「人生を侵食してきたとしたらどうなのかしら」と危惧する

一句を見れば明らかのように、その了解不能な事態は寺子を不安や極度の混乱に陥れる。寺子はこの半年間働いていない。岩永と会う時間を確保するために退社したためである。それでも、岩永が「毎月、びっくりするほどの額を振り込んでくれる」というから、生活に困っている様子はない。この半年間の生活ぶりを説明した直後に、「つまりはひまだから、寝てばかりいるのかもしれない。」という一文が置かれている。もしかしたら、定職を持たずに「ひま」をもてあましてることだけで了解不能な事態の説明がつくのなら、その後には巻き起こる出来事を語る必要はないし、「もしかししたら眠りに憑かれているのかもしれない。しおりが仕事に憑かれてしまったように。」という認識も生まれなかったに違いない。へひまだから寝るのかもしれないというように、深刻さを吹き飛ばしてしまう

彼女の軽快な語り口が伺われる箇所の直後に、自殺したしおりと何ヶ月か同棲していた彼と「ばったり」出会ったという出来事が語られ、しおりのことを思い出して語る箇所が出てくる。しおり関連の出来事と絡み合うようにして語られるのが、岩永関連の出来事、すなわち、植物状態の妻を抱えながら寺子との関係を一年半続けてきた岩永との不倫の関係が語られるのである。しおりの元の彼としおりのことなどを話して帰宅した寺子は、睡魔に襲われる。が、岩永からの電話に反応してすぐさま眼を覚ます。「ふいに眠りにねじ込んくる」岩永からの電話に即座に反応できる力を、彼女は「超能力」だと言う。「私はたとえ眠っていても、それでも恋人の電話だけはわかる」と、これも冒頭ですでに触れられている。生前のしおりについてあれこれ考えるようになり、しおりの言葉を媒介にして岩永との関係などを考える寺子にとってみれば、眠りの侵食と岩永との関係、親友しおりの自殺はすべてがつながっているのである。冒頭の問いに対して、岩永の振込みによって労働の必要がない寺子がひまだから寝るのだという単純すぎる自問自答ではなく、膨大な睡眠量に対する了解不能性がかきたてる不安や恐怖について、昏睡状態で覚醒する可能性をほとんど失っている岩永の妻、添い寝のアルバイトに憑かれていたしおり、眠り続ける寺子自身という三者を連関させて語ってゆく行為に重点がおかれなければならない。「自分のなかにある闇」と対峙したら、「わけのわからない強さ」が生まれてきたというそのきつかけが、六日間のアルバイトだと寺子は考えている。これまで注目されていないが、寺子がアルバイトで稼いだ給料と、岩永が振込む生活費との関係に改めて目を向けておく必要がある。これについては、後で詳しくふれるが、そのアルバイトへと自分を駆り立てたのは、公園で見た夢の中に現れた岩永の妻だと寺子は信じて、この物語を語っている。しおりの言葉を通して岩永との関係を見つめ直したときは逆に、今度はその夢の中の岩永の妻の指示に従って働くことを通して、添い寝の仕事にのめりこんでいったしおりの弱さを感じ取るようになるのである。

一六五

したがって、寺子自身を含んだ三者を連関させつつ、自問自答してゆく寺子が編み上げた物語、それが「小さな蘇生の物語」であるという前提を立てておきたい。語り手である寺子は、自分の人生そのものを蝕んでしまいかねない了解不能な事態を、語りの冒頭においてまず最初に言うておく必要があったのである。問いを設定したあとで、その〈答え〉にあたるものにむかって語りを展開していくような方向付けをしている。語る順序にしても同様で、

一六六

出来事の再現に際し、その配列に気を配りながら、「小さな蘇生の物語」が織り上げられてゆく。

2

たとえ眠っていても、岩永からの電話だけはわかると豪語する寺子であるが、「信じていた自分の超能力にもガタがきてしまったか」と嘆くようになるのは、「眠りに憑かれてくるのかもしれない」と不安を感じ、添い寝の仕事にのめりこんでいったしおりとの類似に驚愕し始めるときと、ほとんど時を同じくしている。岩永からの電話にも気づかずに眠り続けていた事実を知った寺子は、「とにかく不安で仕方なかった」といい、また「いったん死んでから生き返ったように思えるくらい深く眠る」ことがあるという思いにかられる。この電話事件が起こる前の出来事を語ったくだりでは、岩永といっても淋しさに耐えられない夜、「しおりの部屋にいつも寄った」ことが語られている。しおり亡き今でも、しおりの部屋を訪ねようとしている自分に気づく。それは、岩永が妻の方の親類と会う用事が出来て食事だけしようと誘い出した岩永との話しの中で、妻のことなどが話題になったために互いに気まづくなっていた日のことである。「いよいよ回想と現実の境目が危うくなっている」と寺子は自覚する。ここでは、しおりの思い出を回想する寺子、寺子によって再現されたしおりの発言を通して、この二人の関係を詳しく追っておきたい。

水商売のアルバイトをしていたときにお客にスカウトされて始めた仕事だ。性交渉はないという。

私はね、ひと晩中、眠るわけにはいかないの。だって、もし夜中にとりの人が目を覚ました時、私がぐうぐう眠っていたら、私の仕事にはあんまり価値がないっていうか、プロじゃないのよ、わかる？ 決して淋しくさせてはいけないの。私の所へやってくる人は、もちろん人づての人ばかりだけれど、みんな身分はきちんとした人ばかりよ。ものすごくデリケートな形で傷ついて、疲れ果てている人ばかりなの。自分が疲れちゃって、いることすらわからないくらいにね。それで、必ずと言っていいほど、夜中に目を覚ますのよ。そういう時に、淡い明かりの中で私がつこり微笑んであげることが大切な。(以下略)

客の前では眠らないことが、「価値」だとしおりは言う。商売である以上、そこには金銭的な価値に見合ったサービスの提供に努めなければならないと考える、しおりのプロ意識が明確に打ち出された箇所である。寺子はしおりの死をこの仕事と無関係ではないと踏んでいる。「そういう疲れた人のなりに眠っているとね、その寝息に合わせるとね、その人の心の闇を吸い取ってしまうかもしれない。眼むっちゃだめ」と思いつつ、眠ってしまった、恐ろしい夢を見てしまったしおりは、「この人の心の風景を見たんだわ」ともいう。これを聞いた寺子は、「それはしおりの心の風景なのでは」と思ったが、直接本人には言えなかったと、当時を振り返っている。ちなみにこの出来事は、しおりの元と再会した直後に語られている。眠りにねじ込んでくる岩永からの電話に目を覚ました後、妻の親類と会う用事ができて食事だけしたときのことを語った箇所の直前に置かれている。この順序は見過ごせない。なぜなら、「その人の心の闇を吸い取ってしまうかもしれない」というしおりの言葉を再現したあとで、岩永の「心の疲れの暗闇を写しとった私」という表現がでてくるからである。

妻の親類と会わなければならなかったといつて、食事だけ一緒にしようという岩永との会話はあまり弾まなかった。むしろ、妻の看病に疲れ果てた岩永は、ちょっとした寺子の言葉に過敏に反応し、気まづくなる一方であった。この食事場面の直前に置かれた、添い寝の商売の心得について話したしおりの言葉が、寺子と岩永と二人の間の淋しさを鮮明に浮かび上がらせる言葉として機能し始めていく。約束の時間にあられた岩永の姿を見て、寺子は、夏の半ばを過ぎているのに、「いつもコートやセーターのイメージがある」と思う。この「心の風景」という語は、直前で再現されたしおりの言葉のなかに出てくる、「この人の心の風景」という語の連想から引き出されている。食事の場面の合間合間に会った当時の二人の思い出なども差し挟まれる。語る出来事の配列という点で、添い寝の仕事について熱心に語ったしおりの言葉との連鎖関係を考慮に入れれば、この食事場面の再現にあたって、そのような時間の錯綜を語りの現在において語り手が作り出しているといえないだろうか。この食事場面の合間に、「私たちの恋は現実ではない」と述懐する一節が挿入される。

疲れれば疲れるほど彼は、現実から遠いところへ私を置くようにしている。はつきりとそう言わないので本人にとって無意識の望みには違いないのだが、私をなるべく働かせず、いつも部屋にいてひっそりと暮らすことを好み、逢うときは街の中で夢の影のように逢う。美しい服を着せて、泣くことも笑うことも淡いものを求める。いや、やはりそれも彼だけのせいではない。彼の心の疲れの暗闇を写しとった私が、そういうふうになるまうことを好んでいるのだ。(以下略)

先に寺子によって再現された、「心の暗闇を吸い取ってしまうかもしれない」というしおりの言葉は、「彼の心の疲れの暗闇を写しと」という言い方となって現れてきたのである。このようにみると、添い寝の仕事について熱心に語ったしおりの言葉が、寺子の語りを規定する力を持ち始めているのがわかる。と同時に、岩永がはつき

りとそう言ったのではないと補足しているが、寺子がそのように捉えていることが確認できれば十分であろうと思われる。だとするならば、多額の生活費を振り込んで、「なるべく働かせず、いつも部屋にいてひっそりと暮らすことを好」んでいるのだから、岩永が寺子を部屋に閉じ込めていることにもなる。生活費と引き換えに、閉じ込められているような身になっていることをどう認識し、どのような態度で臨むのがポイントになるであろう。また、後述するように、岩永の話の聞き役に徹して、「無口な女」と化してしまふ寺子は、しおりの添い寝によく似ていると感じている。従来、「死の世界に去ったしおりに接近して」いる点や、寝ることの共通性から説明されているが、ここに金銭の授受が絡んでくる点を見過してはなるまい。プロ意識を持ったしおりが、客が支払う金銭の代価として提供するサービスと、多額の生活費を振り込む岩永の聞き手となり、疲れきった彼の心を癒す役割とのアナロジーに注目する必要があるからである。振り込まれる生活費が、岩永と会う時間を確保するために会社を辞した寺子のために支払われている以上、この金銭の授受が継続する限り、寺子は「ずっと家でただ電話を待」ち続けるしかない。そのように閉じ込めることで寺子との関係を確保し、電話に出て待ち合わせの約束をし、聞き役に徹するという位置に固定するのであるから、金銭が媒介する関係が成立し、閉じこめられることを助長するばかりなのである。

気まずくなったために、「車のドアを閉めてあげ」て、岩永の話を「それ以上聞きたくなかった」と感じる寺子は、この世にいないはずのしおりのマンションを訪ねて行こうとし、「回想と現実の境目が危うくなって」しまふ。この直後には、岩永とのことを相談したときの事柄が置かれている。いましがた述べたように、岩永といると彼の話の聞き役に徹している自分に気づいた寺子は、『話す』リズムと『うなずき』のリズムがほとんど芸術の域に達して絶妙のバランスをとりはじめた頃、私はそれがしおりの添い寝によく似ているような気」になる。そう感じる

一六九

よくなったときに交わした、次のようなやり取りが再現されるのはなぜだろうか。岩永と寝ていると「真冬ぽい」のはなぜかについて話題になったときである。

「だって私プロだもの。」としおりは目を細めて言った。「あのねえ、そういう人は決まった約束ごと以外はとりあえず全部無だと思ってるのよ。」

「む?。」

「だから、不安なのよ。寺子を自分のものだと思うと、自分の立場とかがものすごく不利でしょう? だから、今のところは、あなたはとりあえず無なの、保留なの、ポーズのボタン押してるの、買い置きなの、人生のおまけなの。」

「ええっ……わかるような気もするけど……無って、どんなの。私、あの人の中でどんなところにいることになってるの。」

「真っ暗闇の中よ。」

しおりは笑った。

この説明を再現したことにより、この出来事の時点で寺子がしおりの説明に絶対的な信頼を置いていることがはっきりとわかるようになっていく。寺子は、岩永が「現実から遠いところへ私を置くようにしている」と感じていたが、この「現実から遠いところ」と、しおりが笑いながら言った、「真っ暗闇の中」とはイメージ的にはかなり近い。心が疲れ果てた人と接する「プロ」が説くこれら一連の説明が説得力に富んでいたからこそ、今もしおりに会いたいという強い願望が生じたのに相違ない。「私たちの恋は現実ではない」という一句は、しおりの言葉によって引き出され、寺子の語りを大きく左右するほどに、この出来事の時点において、しおりの言葉に絶対的な信頼が

一七〇

置かれているのである。

このしおりの言葉に対する絶対的な信頼は、しばらくの間、揺らぐことはない。岩永からの電話を見分ける超能力に「ガタがきてしまったか」と不安な気持ちになり、「眠りに憑かれているのかもしれない」と懸念することはあっても、岩永が「すべてにどんなに疲れ切ってしまったているのか、一緒に寝てみると最近、よくわかった。」とあるから、添い寝の仕事にはまり込んだしおりとの類比を怖く思うと同時に、寝てみることで十分に理解されるという添い寝のもたらず効果をも確認している。一緒に寝てみて、実情を一切語らない彼の疲れきった心の状態を察知したと言うのであるが、この日の出来事が語られた箇所には、しおりへの思いが挿入され、そのために見たしおりの夢が織り込まれる。

見ているうちに彼はひとり安らかな呼吸で眠りにつき、閉じたまぶたを眺めながら寝息を聞いていたら、本
当に夢の中が見えてしまいそうだった。

たったひとりどこか夜をさまよう意識。(中略)

本当にそのとおりね、しおり。最近、わかる気がするの。影のようにその人のとなりに眠っていると、影を
吸いとるように、心を写しとってしまいかもしれない。そうやってあなたみたいに何人もの夢を知ってしまっ
たら、いつの間にかもう戻れないし、それが重すぎて死んでしまう他なかったのかもしれないわね。

すぐ隣にいる岩永の夢を見てしまいそうになった体験を通して、しおりの言葉の真実味を感じ取り、いよいよ彼
女の言葉を「そのとおりね」と確信して行く。この直後にみる夢は、しおりが白いチューリップを一本一本活けて
ゆくところであるが、しおりが死んでからはじめてみた夢であるという。この夢から覚めたときに、「わかった。ど
ういうことか本当にわかった気がした。添い寝は、今の私こそがしてもらうべきことだった。」という興奮した心境

一七二

が吐露される。「今の私」とは、岩永の心の疲労を感じ取ってしまった寺子を指す。岩永と一緒に寝て、「しおりの
話をしている夢」を見たとき、夢の中のしおりに語って聞かせる寺子が登場するのであるが、現実には岩永が隣に
いることとまったく共通するために、「もうひとつの現実」だと驚いてしまったのである。いったん目が覚めた寺子が再
度、「暖かい深い眠り」につき、次に目を覚ましたときには、岩永は会社に出勤しており、ベッドにはもういない。
寺子は十分に睡眠をとったはずだというのに、「頭がまったく冴えない。この状態と、しおりの添い寝を理解し、死
後はじめて夢を見るということとは無関係でない。しおりの言葉を反芻し、彼女の言葉への絶対的な信頼が強まる
につれ、ついに彼女と近いところにいることになってしまったわけである。そうだからこそ、その後、はっきりと
覚醒しないのである。岩永からの電話のベルだとわかっているにもかかわらず、どうしても起きられないという状態にまで追い
込まれてしまう。「薄れゆく意識の中で」「敵は、きつと私だ。」と確信し、「真綿のように私をゆっくりと締め付け、
私の生気を吸いとっていった」眠りの中に落ちてゆくのである。しおりのいる世界Ⅱ死の世界への接近は、しおり
の言葉に呪縛されたことと密接に結びついていたのである。

しおりの言葉を思い起こし、彼女の言葉に対する絶対的な信頼のもとに岩永との関係をとらえてかえして行く寺
子であったが、それは徐々に添い寝の仕事にのめりこんでいったしおりと同じ状況下に置かれてしまったというこ
とでもある。疑う余地がないほどに、信頼してきたしおりの言葉との決別、しおりⅡ寺子の結合が、解かれるとき
がないかぎり、寺子もしおりのようになってしまふであろう。眠ってしまったらプロ失格だとまで言い放つてい
たしおりが、「睡眠薬をたくさん飲んで」死んでしまったという。眠りを拒んだ者が、眠りを求めるといふ結末――
言葉や理解の次元だけではなく、眠りの世界に引き込まれようとしている寺子の置かれた、この時点の状況も、し
おりが求めた世界と非常に近いところだったのである。そのような危険な領域にまで行き着いてしまっている寺子

を救い出すきっかけを与えるのが、もう一人の眠りの世界の住人、岩永の妻である。

「敵は、きっと私だ」と確信しながら、深い眠りに落ちていった寺子が、次に目を覚ましたのは、あくる朝の五時であった。部屋に入るとまた眠りに陥ってしまう怖さに、そのまま外へ出て行った寺子はGパンをはいた高校生くらいの女の子に声をかけられる。しおりといっしょにおにぎりを買って食べたという過去を思い起こしていたとき、急にこの女の子から、「今すぐ、駅に行きなさい。」といわれて驚いてしまう。しおりのことを思い出して、眠りかけていた途端に、「きびしい顔」で忠告する女の子を、寺子は岩永の妻だと思う。アルバイトニュースを買って、働きなさいと忠告するこの女の子は、「私のせいで疲れているような気がして、……そんなふうに見えて……ごめんない。ごめんね、私が誰だか、あなたわかるでしょう?」と語りかけた。寺子が岩永の妻だと察知したのもそれが根拠だと思われるが、眠りの世界に引き込まれる危うさから逃れる機会を与えた人物が、岩永の妻であることの意味は何だろうか。

昏睡状態にある眠りの世界にいる岩永の妻が、現実の世界へと押し戻し、働くように訴えかけるが、これはちょうど生活費の振込みと引き換えに、閉じ込められてしまった部屋からの脱出という意味を持つてくる。そして、岩永のことを「私をなるべく働かせず、いつもひっそりと暮らすことを好」む人だという考えを切り崩してゆくことにもつながっている。「現実ではないような恋」を、「生き生きとした恋」へと反転させるためには、そのような手続きが不可欠なのである。しおりの言葉にすがりつき、疲れた心を癒していたことや、働かずにいる自分を反省することなく、岩永が閉じ込めてしまったとのみ嘆いていたことは、いずれも他者に依存したあり方でしかない。その

ようなことに気づきえたからこそ、「敵は、きっと私だ。」という確信を得て自己相対化できたわけであり、意識的にしおりの言葉への絶対的な信頼をも相対化する視点を獲得するにいたるのである。「しおりは弱すぎた」という一句は、そのような流れの上で読んでおく必要がある。

働くことを通して、自分の中のいろいろなことがどんなに「退化」していたかを思い知ったと寺子は実感した。

いつでもすぐ次のことがはじめられるということ、希望や期待みたいなこと……うまく、いえない。でもいつの間にか私が投げてしまったこと、自分でも気づかずに、しおりも投げてしまったことが、きっとそれだった。運さえよければ、それでもそのままずっと生きてゆけたのかもしれないけれど、それに耐えてゆくにはしおりは弱すぎた、流れも彼女を丸ごとのみ込んでしまうほどに強かった。

しおりの弱点を指摘するあたりには彼女が得た自信が感じられる。しおりに頼り切っていたときには見えていなかったであろう。そして、しおりの弱点は眠りの世界に引き込まれそうな危うい状況にあった寺子自身の弱点でもあるが、しかし、その弱さを乗り越え、「わけのわからない強さ」を得た寺子でもある。働かなかったことから、働くことによって眠りの世界からの脱出を果たした寺子は、出会ったばかりのころの岩永と自分を思い出した。仕事ができるのにもかわらず、手抜きしていた頃のことである。岩永も出会ったばかりのときの元気を寺子が回復したと感じている。働くことによって覚醒をとげた寺子は、振り込まれる生活費を当てにして、部屋に閉じこもって電話を待ち続ける生活からの脱出を遂げる。その先どうなるかは不明だとしても、「身をまかせ」のでもなく、「抵抗を止め」るのでもなく、「抵抗」を決意すること、そして抵抗する力こそが、「わけのわからない強さ」の源にある。この力はちやうど岩永と会うと言葉を発しなくなるといふ沈黙と対極にある。相手の話にあわせ、余計なことはいっさい語らない。自らの言葉の抑圧が心の疲労を助長させていたということは十分に考えられる。眠る

ことは疲れを癒し、来る岩永との出会いに備えてエネルギーを充電させるために行われるのみである。それは、外部との折衝を閉ざし、『現実ではない恋』を強めてゆくことにもなる。

眠らないことに価値を見つけ出したしおりは、多量の睡眠薬を服用して眠りの世界に入ってしまった。そのしおりの言葉に絶対的な信頼を寄せるうちに眠りの世界ぎりぎりのところにまで接近してしまった寺子は、眠りの侵食という理解不能だった現象を、物語る行為を通して、他者の言葉とのなれあいをやめ、相対化することを経験した結果に了解していったのだ。いや正確には、寺子の何ら変わってなどいないと自覚し、「小さな波」の襲来をこれからもうけると覚悟する寺子にとって、「小さな蘇生の物語」に、ある事態の完全な解決や安寧の永続をたやすく信じて安堵する気持ちを読むべきではない。この「物語」を必要以上に誇示しない謙虚さをあらわす「小さな」という修飾語句には、完璧さや永遠性によって得られる安寧を、むしろ拒む姿勢が暗示されている。「細い腕、弱い心のままでつなぎとめ」たい、「不確かな全身」で受止めたいという強い意志が立ち上がってくることを語ることにこそ意義があったのである。

4

与那覇恵子氏は、「ある体験」を「チャネリング体験を描いた作品」と規定した。夜ともなるとビールを皮切りにして、夜がふけるとだんだん濃い酒を飲みはじめ、「もう少し飲むとよく眠れるなあ」と思って、ますます酒量が増す。「文ちゃん」と皆に呼ばれている語り手の「私」は、「ぐてんぐてんのくるくるになってベッドに倒れこむ時」に、「気持ちのよい歌声」を聞くのだという。この歌声を、「心のいばん固くなったところをマッサージしてくれるよう」だと「私」は感じており、そこに不快感はない。「わずかに残った意識」というのだから、相当量の酒を飲

一七五

み干したあげく、「深く考えることができるほど正気ではないほどの、朦朧とした状態の中で、そのメロディーに耳を傾けるうち、眠りがおとずれてくるようだ。要するに、意識が遠のいてゆきつつある、ぎりぎりのところでキヤッチされる歌声なのだ。最初、「私」はこれを「幻聴」と心配し、「アル中」ではないかという疑念を抱くのだが、水男は死者からのメッセージではないかという。そして、かつて一人の男を取り合った「春」という女性ではないかという話になり、霊媒師であるコビトの田中君を紹介する。「コビトの霊媒」を体験し、死んだ「春」との再会を果たした「私」は、足取りも軽く、酒量が減るかも知れないという晴れやかな気持ちになる。以上が「ある体験」の物語内容である。

一七六

語りの現在時において、「私」が交際している水男は、「酔ってる時や、寝しなつて、シンクロしやすい」のどと言つて聞かせる。「夜が来ると」という言説があるから、「私」は昼間から酒を飲むようなことはないと考えてよさそうである。酒に酔つて意識が朦朧としてきて、眠りにつこうとする時間帯がポイントであり、言い換えれば、この物語は、夜を死者とのコンタクトがとれる時間帯として、よりいっそう強調する形で描いているのである。春の死を知った日の夜、思いっきり多量の酒を飲んだ「私」に「お酒にのめり込んでゆく春の心象風景」が見える。男が姿をくらましてから、「奇妙な三角関係」にピリオドが打たれ、春はバりに渡り、アルコール中毒で入院を繰り返すが、最後は悲惨な状態で息を引き取っていったらしい。男が去ってから、「自分が立て直せなくなった春のことがよくわかった」と「私」は断定し、「その位、自分の持てるものをすべて出しつくす恋だったからだ」と理由を添えている。その春に対して、「私」の方は水男と交際し始める。「激情」に満ちた日々とともに憎みあい、ののしり合っていた二人が、今度は酒にのめりこむというよく似た状況に置かれる。「私」が、「毎晩、飲みすぎていたのは偶然だったのだろうか。その時春はいつも近くにいたのだろうか。」等々の「謎」を並べたあげく、次のようにまと

める。

あらゆる謎を越えて、気持ちのいい夜風が今の心をさらっていった。

「何だか、明日から酒量が減るような気がする。わざとらしいかしら。」

私は言った。

「でも、どう考えてもそう思う。」

「きつと、そういう時期にさしかかったんだよ。」

水男は笑った。

水男の中ではすべてが「時期」なのだろうか。私のことも、私といることも。

優しすぎるということは、きつと、冷たすぎるからなのだろうか。

「今の心」とは、「コビトの霊媒」をうけた後のさわやかな気持ちであり、現実に戻ってきた直後の「毒が抜けてしまったような」心的な状態である。「私」が、酒量が減ると強く感じたのはなぜか。やはり「飲みすぎていた」のが「偶然」でなく、春のメッセージだったのだと理解したからに相違ない。そして、このシーンのすぐ後で、「新しく始める生活の中で、2人はどうなってゆくのだろうか？」という問いを付け足している。死者からのメッセージを「コビトの霊媒」によってつかむという体験が語られる合間合間に、水男に対する不満や不可解さを吐露した言説がさしはさまれているのである。ここには、パトロンとの暮らしの中で春が酒に救いを求めたことと、雑貨屋のオーナーである彼に「ひろわれ」、半年後まで無職である「私」が酒にのめり込んでいくこととの間の共通性が絡んでくると考えられる。「偶然」ではないと悟ったとしたならば、そこには語り手「私」による関連づけがなされているとみるべきだからである。もちろん、「白河夜船」の寺子が働かないこととも関連する。

一七七

酒にのめり込んでいった春と似たような状況にある「私」が、多量の酒を飲むようになったきっかけを水男は次のように説明する。

一七八

「少し依存の傾向が出ているにしたって、そりゃあ、今、君がヒマだから、つい飲みすぎてしまうからだろう。また仕事のはじまりや元に戻るし、今くらいのおんぴりという生活したっていいに決まってるのさ。(以下略)」

「私」は「少し前まで」水男と同じように雑貨屋で働いていたが、その店がつぶれてしまい職がない。酒量が増し始めたのと職を失ったときがほぼ一致する。雑貨屋のオーナーである水男が半年後にオープンする支店に「ひろわれること」が決まっている。「ある体験」というテキストも、酷似した他者の存在に気づき、それを冷静に見据えることによって自己を見直してゆくという要素がひろい出せるわけである。したがって、自分を立て直せなかった春の「不安定」さを批評していた「私」の中にも水男との「新しい生活」に対する不安がさらけ出されてしまったことになる。「私は今、水男という幸せだから」と言いながらも、春と同様に酒に救いを求める「私」の潜在意識が引きずり出されてしまったのである。

「私」は、「時々モノを見る目で私を見ている」水男の「冷徹なまなざし」について言及している。オーナーである水男に「ひろわれ」と語った箇所が続くところである。「酒にまみれた私の日常が次のステップに向かって見せているいろんな『心のこり』のイメージが春のかたちをしているのかもしれない。」という箇所の、「次のステップ」とは、2人の新しい生活、すなわち、水男の店で働くことを意味している。そういう転機にさしかかってわだかまっていることや、心配事などが噴出して、そのことからの脱却、自分の「立て直」すきっかけを得た体験が語られているのである。

「白河夜船」の寺子と岩永、「ある体験」の「私」と水男——それぞれの男女の関係に何らかの形で作用するものとして、眠りの世界や、死者とのコンタクトを可能にする時間としての夜が物語内に組み込まれている。寺子は「ちばんいやなところ」を通過できたと思ひ、「私」は「毒が抜け」たと話す。三角関係の当事者でない人物が語り手である「夜と夜の旅人」と設定が異なる「白河夜船」と「ある体験」であるが、男性キャラクターとの共同作業や親密なつながりのなかで、克服するという形をとらない。また、寺子の求めた「生き生きとした恋」は、馴れ合いや相互依存的なものからの脱却であるし、潜在的な不安との対峙によって「新しい生活」へのステップを歩んで行くことを決意した「私」にしても、それぞれが乗り越えてゆく際の直接的な契機を与えるのが死者、あるいはもう二度と意識の回復が期待できない植物状態にいる者であった。

それとともに、次のような時間のゆがみについても思いを巡らす必要がある。夕方の五時だと思ひ込んでいた寺子は、実は朝の五時であった。この時間の錯覚後に、公園で夢を見る。また、「私」が「ほんの短い時間」だと感じた意識を失っていた時間が、約二時間であったと水男は証言する。「ある閉塞した状態、時間の流れが停止した期間」(『白河夜船』の単行本「あとがき」とは、出口が用意に見つけ出せない閉じた環をぐるぐるまわっている状態であり、前のめりに進んでゆく均質な時間の流れがせきとめられた期間と言ひ換えることができる。直線的で不可逆な時間の流れを正常な、あるべき時間の流れだととらえる立場からすれば、異常で、否定すべき状態ではない。しかしながら、直線的な時間の流れの中にいることに慣れてしまった感性では伸縮する時間を感じ取る感覚が麻痺してしまっているともいえよう。たとえば、『野菜スープ』(『吉本ばなな自選集』「e Death」(平成十二年十二月)書き下ろし)には、時計のない部屋に招待された「私」が感じる、「思ったよりも時間が伸び縮みしてゆく」ような感覚とでもいったものである。「ある閉塞した状態、時間の流れが停止した期間」にはまり込み、そこから戻ってく

ることによってでなければ得られない体験が語られている(夜の三部作)は、一時停止ではなく、もう一つ別の時間の流れを自力でくぐってきた者たちの物語と言えるのではなからうか。

彼女たちがはまり込んだ世界——それは眠りの世界であったり、死者に近い世界であったりするが、「一時停止」や「逃げ場」という性質のものなどではないだろう。そのような静的、消極的なものではなく、むしろ、吉本ばなな作品の場合、「睡眠のさいには覚醒時の意識が一時的に終わり、もう一種類の意識がそれを引き継ぐ」というとらえ方の方がふさわしいのではないかと私は考えている。夢の場面で岩永の妻からのメッセージを受け取るのも、死者との交信が前提されるのもそのような観点から説明できるのではなからうか。睡眠が覚醒のための準備的な役割にとどまるのではなく、睡眠時の別の意識の働きも重要な役割を果しているのである。そして、そこでつかんだメッセージを元に、閉塞状況からの回帰を成し遂げてゆくのである。これは、『キッチン』からすでに続くテーマだと見てよいが、(夜の三部作)との接点を認めるのかどうか、認めるとすれば、(夜の三部作)を經由して、『野菜スープ』でたどり着いた「ある到達点」をどう考えるのか等まで考察する必要があると思われるが、この点を含んだより広い視野の中での縦断的な考察は別稿で改めて論じようと思う。

注

- 1 例えば、少女マンガ的な文体を指摘するものや、根岸正純「吉本ばななの言語空間」(平成十二年四月、現代批評フォーラム「黙示録」)のように、「言い回しの問題」や「ばななの作品に見られるユニークな表現」の検討が多く、物語に直接関わらせての物語言説の考察とは言いがたい。そこで、拙稿「吉本ばなな「夜と夜の旅人」試論——(夜の三部作)論のためのノート——」(平成十四年三月「駒澤大学文学部研究紀要」)では、語り手の表現行為と物語言説について考察したので参照されたい。

2 極限状態にまで落ち込んだ人が、過酷な状況からの脱却や克服をとげる物語は吉本ばななの作品によく見られる設定である。例えば、『キッチン』（昭和六十二年十一月「海燕」）でも、「まあね、でも人生は本当にいつぱん絶望しないと、そこで本当に捨てられないのは自分のどこなかをわかんないと、本当に楽しいことがなにかわかんないうちに大きくなっちゃうと思うの。（以下略）」という台詞がある。えり子さん・雄司は、少年時代に後に妻になる女性の家に「何かの事情で引き取られ」ていたという。駆け落ちして一緒になった妻が亡くなって、性転換したえり子はみかげと同様に、血のつながった家族の結びつきとは縁の遠いところにいた。そのようなえり子の口から出てくる言葉にみかげは重みを感じていたに違いない。絶望の淵から這いあがったえり子のいう、「みかげは、みどころありそうだから」という言葉は、極限状態を脱した人間の眼がとらえた評価といってよい。幼い頃に両親を失い祖父も祖母も亡くしたみかげの心を癒せるのも、そのような理由によると思われる。

3 木股知史氏は、この類比の重要性を指摘し、しおりのいる死の世界に寺子自身が向かっていることに気づいていると述べている（編著『イエローページ 吉本ばなな』中の「眠りⅡ死」からの帰還）（平成十一年七月、荒地出版社）。

4 木股氏は、前掲注3の中で、「好き勝手な方向を向いてしまふ」白いチューリップを、「しおりに添い寝してもらった人たちの心の状態示しているのかもしれない」という解釈している。

5 「身体性と幻想——「アムリタ」を中心に」（平成六年二月「国文学」）。この論の中で与那覇氏は、「何年かぶりで「洗われた」自分に出会うという自己啓発の話である」とも述べている。

6 最愛の夫を亡くした女性について「私」が語るというスタイルの小説であるが、『キッチン』や〈夜の三部作〉とを貫きながら、到達した地点が示されたテキストと考えられる。ちなみに、『吉本ばなな自選選集』の「あとがき」には、『野菜スープ』によって、「長年書き続けてきた死についての、「ちっぽけ」だけ、ある到達点を見た」とある。これらを含めての考察は別稿を用意したい。

7 宮島公夫は、寺子の眠りを「自分を取り巻く何等かの外的状況の変化が精神内部を腐食し、適応力の弱くなった精神がさらけ出す退行現象としての眠り」と規定している（平成二年二月、金沢近代文芸研究会「イミタチオ」）。この見解に対して反論する尾形亜紀氏は、「眠り」は現実で傷ついた主人公が身を寄せる一時の逃げ場であり、そこで癒され、もう一度歩き出すための力を蓄える場である」と述べている（平成十四年三月「椋山国文学」）。尾崎氏は「一時停止」に過ぎない」という言い方もしているから、眠りを再生産力を充電するための休息を与えるものというイメージでとらえているように見受けられる。吉本ばなな作品の〈眠り〉に、「退行現象」という消極的ではない面を見ようとする点は示唆に富む論といえるが、「一時停止」や「逃げ場」ととってしまったり、消極的なままになってしまったりうな気がする。

8 W・C・デメント、大熊輝雄『スリープ・ウォッチャー』（平成六年五月、みすず書房）。なお本書には、「睡眠と覚醒とは双生児の同胞であり、睡眠は覚醒の一人前の仲間」という考え方や、「睡眠は活動的な状態」といった言い方が随所に見受けられる。

〈付記〉

吉本ばなな作品からの引用はすべて『吉本ばなな自選選集』（新潮社）「1 Occult」「2 Love」（二〇〇〇年）、「3 Death」（二〇〇一年）に拠った。